ARPAK・NEWSLETTER

アルパック ニュースレター

VOL139　2006年9月1日　ISSN 0918-1954

上山高原からの眺め（本文中に関連記事があります）

目次／contents

人・まち・地域・・・・・・・・・・・・・ 2
・上山高原エコミュージアムがグランドオープン！
／畑中直樹・吉田久視子
・上山高原ふるさと館～校舎の面影を遺伝子として～／原田稔
・「高槻のええとこ」ネタに語り合おう！～高槻のええとこブログ～
／坂井信行
・「地域福祉計画の100人委員会の現場から」明石市地域福祉計画の市民参加／大河内雅司
・シアトルに学ぶパートナーシップによる中心市街地活性化のトレンド／尾澤律子
きんきょう・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
・「北大阪打ち水大作戦」２年目の展開
／畑中直樹・原田弘之・森岡武
・クリエイティブ・カフェと自由大学／杉原五郎
メディア・ウォッチ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
・「モナ・リザと数学」ダ・ヴィンチの芸術と科学
／取締役会長　三輪泰司
まちかど・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
・篠山城下町で古民家の修理事業が始まりました／和田裕介

上山高原エコミュージアムがグランドオープン！

大阪事務所／畑中直樹・吉田久視子

上山高原エコミュージアムがグランドオープン

平成13年度の基本計画策定から5年以上の月日を経て、運営組織の立ち上げや自然再生事業、各種体験プログラムの試行などの準備が進められてきた上山高原エコミュージアムで、さる7月29日・30日とグランドオープニングイベントが開催されました。初日29日は、ビジターセンターである「上山高原ふるさと館」でのテープカットを皮切りに、記念式典、館内見学、エリア内各資源の視察プログラム、交流会などが行われました。

記念式典は、さえもん踊りや傘踊りなどの郷土芸能披露に始まり、主催者であるNPO代表理事・新温泉町長・兵庫県知事の挨拶のほか、小池環境大臣からのメッセージ披露、地元小学生や当日の参加者全員が10年後へのメッセージを書いた木簡のタイムカプセルへの投入・封印式などが行われました。

夜は、地域各種グループによる芸能披露や上山高原の食材を活かした屋台などによる交流会が行われました。ここでは、私たち神戸組も、上山高原に生息する貴重な鳥「イヌワシ」の主要な餌でもあるウサギを地元の昔の鍋料理「ジャブ」にしたメニューなど出展し好評を得ました。

「上山高原エコミュージアム」とは

「上山高原エコミュージアム」は、上山高原や麓の集落をまるごと生きた博物館ととらえ、自然と共生してきた地域の暮らしに息づく知恵を学び活かし、地域内外の交流を図ることで、かけがえのない自然を次代に継承するとともに、地域の活性化に寄与することを目的とした取り組みです。

地元が中心となった特定非営利活動法人上山高原エコミュージアム、新温泉町・兵庫県の3者により運営されています。

現在、5つの部会が活動しており、ブナやススキ草原などの貴重な自然の復元活動、地域の資源を活かした多彩な交流・体験プログラム、特産品の開発などが進められています。

本物志向の多彩なプログラム

次ページにご紹介するように、中学校校舎を活かして建てられたビジターセンター「上山高原ふるさと館」がオープンし、ますます交流の場やプログラム体験の機会が増えています。下記以外にも様々なプログラムを随時受け付けています。

＜平成18年度プログラム＞

・秋のエコフェスタ：ブナ植樹など（10月）
・きのこ観察会（11月）
・しいたけ菌植え体験（12月）
・わら細工教室（12月）
・かんじきハイキング（2月、3月）

上山高原は、京阪神の都市部などからは少し遠いですが、原生的自然や冬の雪と闘い、その恵みを活かしてきた環境と共生の奥深い歴史や文化を学び、体験することができます。

持続可能な社会のモデルを目指して

これからも、地元のNPOを中心に、自然復元作業、特産品の開発、エコツーリズムプログラムの開発、生業や技術の伝承、さらにはバイオマスなども活かした循環エネルギー系の取り組みなど、新たなプログラムを開発・実施していきます。ぜひ、みなさん一度参加してみてください！詳細はホームページをごらんください！

http://www.ueyamakogen-eco.net/index.html

記念ハイキング

プログラム縄づくり

子どもたちも木簡を投入！木簡は自然再生事業による間伐材、カプセルはイタヤカエデの大木（台風による倒木）をくりぬいたもの

上山高原ふるさと館
～校舎の面影を遺伝子として～

大阪事務所／原田稔

この施設は、旧温泉町内の中学校の統合により廃校となった中学校の木造校舎を改築し「上山高原エコミュージアム」の拠点施設として再生したものです。

ここでは上山高原の資源や地域全体を紹介するインフォメーションや展示室に加え、地域に伝わる木工細工や郷土料理を体験することができる体験作業室や郷土料理研究室を設け、地域の文化や生活様式を体験によって学ぶ事が出来ます。

この建物における建築計画上の目標は、地域の人々の校舎への思い、校舎の面影を遺伝子として組み込みながら、「上山高原ふるさと館」としての新しい生命を吹き込み再生することでした。

写真上：改築後　下：改築前

そこで先ず、構造補強により肉体的な再生をはかりました。次に外観については校舎の外形や窓などの特徴的なデザインは残しながら、構造的な改修に合わせて屋根と外装を全面やり替え、建物の内部については、校舎の特徴である長い片廊下のデザインはそのまま活かしました。また、インフォメーション等施設の顔となる、デザイン的に改修が必要な諸室や郷土料理研究室のような設備的、機能的な改修が必要となる諸室を１階に配置し、２階部分は廊下や教室の内装や扉、窓のデザインをそのまま残し、展示室や体験作業室等、既存の教室で対応できる諸室を配置しました。

さらに、内装の色についても廊下等、校舎の面影の残る部分は既設と同系色の色を基調に少し明るめの色を採用し、古い建物のイメージを払拭し、若返りをはかりました。

施設機能としては、常設の展示室や体験作業室に加え、昔ながらの雰囲気の中で山の生活体験ができるように、インフォメーションと隣接して「いろり」を囲む広い板間を設置し、新しい施設の顔としました。ここでは地元の人々から郷土料理やしめ縄づくりなど、日常生活に根ざした知恵や技術も学ぶことが出来ます。

さて、建物は元気いっぱい若返りました。このオーラを受けて、「上山高原エコミュージアム」のますますの活躍が期待されます。

建築面積：564.428 ㎡
延床面積：944.251 ㎡
構造規模：木造　地上２階建て

校舎の面影を残す長い廊下

教室を活用した「展示室」

改修により新設された「いろりの間」

「高槻のええとこ」ネタに語り合おう！
～高槻のええとこブログ～

大阪事務所／坂井信行

景観法の施行以来、各地の自治体で景観計画の策定に向けた取り組みが進められていますが、高槻市でも昨年度から作業が開始されました。中核市である高槻市はいわば自動的に景観行政団体になりますが、今後の本格的な景観づくりに向けた新たな一歩が踏み出されました。

身近な景観に目を向けよう

国土交通省が発表した美しい国づくり政策大綱では「悪い景観（景観阻害要因）とだれもが認めるもの」「優れた景観とだれもが認めるもの」「普通の地域（コンセンサスがないところ）」に分け、コンセンサスの状況に応じて施策を展開していくことの重要性が示されています。この中では「普通の地域」の景観をどうしていくかが一番難しいのではないでしょうか。

例えば、身近なまちの何でもない景観をよくしていくためにはどうすればよいのでしょう。まずは私たち自身が身近にできるところから取り組んでいくことができます。そして個人の取り組みを地域に広げていくことができれば、地域で大切にしたい景観についてのコンセンサスにつながるかもしれません。そういう意味で、よりよい景観づくりのためにはまずは私たちみんなが景観に対する意識を高めていくことが重要であるといわれています。

「高槻のええとこ」教えてください

現在、多くの自治体では景観計画策定に向けた取り組みの中で、景観写真の募集が行われています。市民にお気に入りの風景やまちなみの写真を応募してもらうことで、自分のまちの身近な景観に目を向けてもらうことが一番のねらいです。また結果として景観づくりを進めていく際に活用できる資源（ええとこ）を集めることができます。

高槻市でも身近なよい景観を探してもらおうと「高槻のええとこ」（お気に入りの景観）を募集しています。優れた景観や悪い景観とだれもが認めるところよりも、むしろ、みんなにおすすめしたい「私だけのお気に入り」を、その場所に対する思いとともに教えてもらおうという趣旨です。また将来的には応募されたの中から市民の人気投票のような形で「（仮称）たかつき百景」を選定することも考えられています。

ブログで語り合おう

応募されてきた写真をもとに市民どうしのコミュニケーションが図れるツールとして「高槻のええとこブログ」も開設されました。応募された写真は随時ブログにアップされ、アップされた写真に対して誰でも自由にコメントを書き込むことができます。フォトコンテストではありませんから、写真の腕前よりも「へえっ」「こんなとこがあったの」「おもしろい」と思わせるようなものをいかに探すかが、ブログで多くのコメントを書き込んでもらうためのポイントではないでしょうか。

開設されたばかりでまだまだ寂しいですが、このブログが大いに盛り上がって市民の間に景観をテーマにしたコミュニティの形成が進むことが期待されています。さてさて、どうなることでしょうか。

高槻市の景観募集ページ（ブログには誰でもコメントを書き込むことができます）
http://www.city.takatsuki.osaka.jp/db/toshikeikaku/db3-keikan.html

「地域福祉計画の100人委員会の現場から」

明石市地域福祉計画の市民参加

大阪事務所／大河内雅司

お客さんから主役に、言い放しから実践に

住民参加で計画をつくる手法のひとつに100人委員会があります。一方で、「団体代表の当て職だと、みんなお客さんのままでしょ」とか、「言い放しになれば、実践は難しいよ」と突っ込みがきます。

明石市の地域福祉計画づくりには、延べ34回の会合に約2,400名の住民が参加することになりました。お客さんではなく主役へ、言い放しではなく提案・実践を目指した100人委員会（市民会議）の約1年半の歩みを振り返ってみます。

住民が運営する地域ふくし広場（住民懇談会）

お客さんではなく主役へ、大きな転機となったのが「地域ふくし広場」です。それは、地域で幅広い住民の意見を聞くために、参加の呼びかけから運営まで住民が行うという、明石市としても初めての試みでした。市内の11カ所で開催し、600名弱の参加によって、地域の課題を掘り起こしました。

何よりの成果は、住民からたくさんの意見が寄せられ、その期待に応えねばと市民会議のメンバーの意識が変わったことです。時間がかかりましたが、「自分たちでやる」というスイッチが入ると、みなさん別人のように動きだしてやりきってしまい、何度も諦めかけた私は「事務局がみんなを信じなくてどうする」と深く反省しました。

住民リーダーの養成と活動の中心組織づくり

地域福祉活動は、行政がすることの他に、官民が一緒にすること、住民が中心となってすることがあります。何をするかも大切ですが、住民リーダーの養成と活動の中心組織づくりに取り組まないと、計画は絵に描いた餅になってしまいます。

絵に描いた餅にしないしくみづくり

一般的には、地域福祉の中心組織は、地域の社会福祉協議会です。しかし、地域はそんなに単純ではなく、協議会が機能していない地域がある一方で、自治会組織や事業者組織が中心となって活発に活動している地域があり、リーダーの存在いかんによっています。

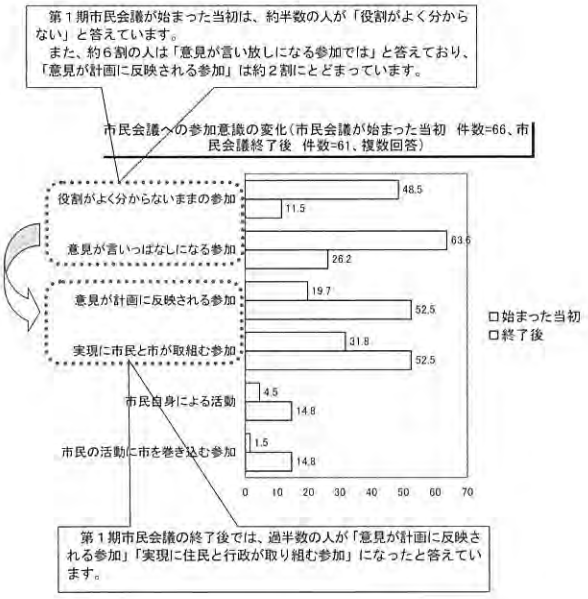
そこで、計画の第1番目の施策では、絵に描いた餅しないしくみづくりを掲げて、①市民会議で住民リーダーや中心組織を育てる、②コーディネーターを配置する、③計画の進行管理を行う、④職員参加として若手職員のチームが市民会議を応援する、に取り組みます。

実践、成果が問われる今年度

第2期市民会議は第1期からの継続者51名と第2期からの新人71名の計122名で再スタートしました。第1期メンバーの約半数が残られ、いよいよ言い放しでなく提案を実践に移します。

今年度の市民会議は、地域ごとの実践であり、①地域の課題をもとに取り組みを決める、②今ある資源をマップとして整理する、③できることから広場で実践してみる、④来年度の企画書をつくる、といった活動に取り組みます。

打ち上げ花火のイベントに終わることなく、地域福祉の中心組織を担っていくリーダーを育てることができるか？地域というベタな場所に入って、市民会議のメンバーと一緒に、小さな成果を積み上げていこうと思っています。



シアトルに学ぶパートナーシップによる中心市街地活性化のトレンド

京都事務所／尾澤律子

民間（NPO）による中心市街地の再生と維持に取り組んでいるシアトルのダウンタウンシアトル協会（以下、DSA）のディビット・ディルマン氏を京都事務所にお招きして、シアトルの官民のパートーナーシップによる中心市街地活性化のトレンドについて、お話をお聞きしました。

アメリカ北西部の太平洋岸に臨むシアトルはワシントン州最大の都市であり、市内人口56万人、都市圏人口300万人を有する港湾都市です。日本ではイチローがいるシアトルマリナーズやスターバックス本店、航空機メーカーのボーイング社、マイクロソフト社やアマゾンドットコム等のIT企業で知られており、また都市・地域計画の面では地下バスシステムとLRTの導入で有名ですが、疲弊した中心市街地の維持整備・治安回復・新規雇用創出に関する一連の再生プロジェクトを民間活力（NPO）により取り組み、さらにその成果をもって、観光客の増大と新たな経済開発へ大きな成果をあげた都市でもあります。

その結果、ダウンタウンへの小売業・飲食業併せて2003年から出店増加率が38％増加し、地区のオフィススペースの空室率は10％を切るといった効果が見られ、企業から進出に関する問い合わせも格段に増加しています。その取り組みについて、お話をお聞きしましたが、再生の要素、戦略、運営・推進体制の三つの要素に大きなヒントがあるように思われました。

京都事務所での講演の様子

再生の要素における勘どころ

まず再生の要素ですが、民間によるリーダーシップと行政との連携、そしてそのパートナーシップを構築・維持するための強力な調整機能を持った組織の存在があげられます。民間によるリーダーシップは、地域に利害関係を持つ関係者が最初に動き出し自分達がまず投資をして、ダウンタウン再生のシンボルとなったパシフィック・プレイスという小売総合市場をつくりあげました。この民間パワーが行政を動かし、行政もダウンタウンに投資し大きな展開につながっていったのです。また、民間側と行政側とのコミュニケーション機能の存在が重要で、その役割をDSAが果たしています。

ダウンタウン再生とDSA

DSAとは1958年に小売店のための商店会のような組織としてできた非営利団体で、次の５つをテーマにした活動を展開しています。まず、間口の広い経済活動を創出して健全な経済状態を形成すること、次に、ダウンタウンへのアクセス（交通環境）を良くすること、安全で魅力的な街にすること（環境整備）、高質なイメージを確立するためのマーケティングやイベント開発、そして最後にメンバーシップへの還元を五つのミッションとして活動を展開しています。

再生の視点

次に戦略とも言える再生への視点ですが、最初は、シアトルも「サンフランシスコのようになろう」「サンディエゴのようになろう」といった声が上がる中、それぞれの都市環境の質の違いを重視し、都市の固有性に価値を置いて魅力的なダウンタウンを創っていったことが功を奏したと考えられます。地域資源としてローカルの存在を大切にし、小さなローカルビジネスを重視しました。その結果、地域の地元の小さな店舗の集合市場が年間１億人の集客をするよ

うになり、このような個性ある地域資源を生かした観光業の活性化を図っています。

そしてもう1点は、アートとエンターティメントのプロモーションです。生活の質を確保するために、アートとエンターティメントは欠かせない要素であり、シンフォニーホールや映画館、野球場、劇場、公共図書館等の整備や大学の誘致が進められました。あわせて、地域全体のプロモーションを積極的に展開しています。特に、クリスマスイベントは盛大であり、その他、コンサートや地元の芸術家のデザインによる50体のくるみ割り人形の展示等のイベントが実施されています。くるみ割り人形は各人形ごとにスポンサーを募集しており、今までダウンタウンの取り組みに関心のなかった企業がスポンサーになることで積極的参加をするようになったという効果も生んでいます。

推進組織と運営

三つ目は運営組織のあり方です。運営メンバーは運営理事会メンバー(無報酬)が60人、有給スタッフ85名を有し、要所要所にプロの優秀なスタッフが存在しています。年間予算は610万ドルで、そのうち約7割がMID（Metropolitan Improvement District tax）と呼ばれる都市改良区税が占めています。

このMIDは特定エリアの土地所有者がそのエリアの保守整備の高水準を維持し土地やビルの価値を高めるために自分達で課している税的仕組みで、市が徴収してDSAに業務委託をしています。DSAはこのMIDにより、就労困難者を雇って、道路等の清掃スタッフ（30人）として活動してもらったり、安全アンバサダーと呼ぶ安全を確保するメンバーは地区をパトロールしたり、災害時の誘導や仕事で遅くなった人の一人歩きのエスコートや街の観光案内役等、街中で多様な活動をすることにより、機能性だけでなく街の活性化に貢献しています。しかし、このMIDも簡単に導入できたわけでなく、その合意形成に2年間を費やしています。

もう一つ重要な点は、予算比率は全体の約8％ですが、約400の会員による年会費が集められていることです。DSAはこのメンバーシップとパートナーシップを重視していることも特徴です。

このような取り組みは、日本とは制度、歴史、文化との違いがあり、そのまま導入することは困難ですが、日本においても、自分の財産だけを大切にするのではなく、住んでいるまちや働く事業所があるまちが魅力的でないと、価値が上がらないことが認識されてきており、地域への意識が高まりつつあるように思われます。しかし、日本の地域運営は行政や住民、NPOなどの様々な主体が関わり合っており、そのため主体者が明らかでなく、最終的には誰も責任を取らないといった危険性をはらんでいると言えます。そのような中で、地域をマネジメントする手法や組織の検討はこれからの重要なテーマになると思われます。

年間1億人を集客する地元の魚市場「パイクプレイスマーケット」

50体のくるみ割り人形を見て回る観光客

街のガイド役「安全アンバサダー」

「北大阪打ち水大作戦」２年目の展開

大阪事務所／畑中直樹、原田弘之、森岡武

昨年度から大阪府においてヒートアイランド対策の一環として取り組まれている「北大阪打ち水大作戦」が２年目を迎えました。

２年目の今年は、昨年から始められた域内各地での地域コアイベントとともに、新たに、ヒートアイランド対策及びライフスタイルも含めたまちづくりのモデル実験としての「打ち水ビレッジ」、関西国際空港での国内外へのPR、様々な主体が一同に集い、今後の展開について情報を交換するフォーラムが展開されています。

打ち水ビレッジ

８月５日～26日にかけて、茨木市春日商店街を中心に、「打ち水」が日常の暮らしに定着し、「打ち水」生活が具現化される協働のまちづくりのモデルとして「打ち水ビレッジ」を展開しました。さまざま「打ち水」の工夫や、ヒートアイランド対策になる具体的方法を“打ち水ビレッジ”で検討することにより、府民の環境意識をより高めようとする試みです。

具体的には、商店街に雨水タンク（ためよーカン130リットル）を４基設置し、朝顔とフウセンカズラ各350株による壁面緑化を試行しました。

商店主自ら五感に訴えかける涼しさの演出として風鈴やおけ＆ひしゃくを通りに飾りました。毎日、夕方５時になると一斉に打ち水が始まり商店街全体を涼しい空気が駆け抜けました。

当初、半信半疑で取り組んでいた商店街のみなさんも、新聞の紙面を飾り、関西ウォーカーで紹介され、NHKのニュースで放映されるなどの予期せぬハプニング続きで、ハイテンションのままに、あっという間の１ヶ月だったことでしょう。

今、冷静に振り返ると、最大の効果は、“打ち水”をきっかけに商店街が「まち」になった、「まち」は人でできているということに気づかされたことではなかったでしょうか。

大阪府をはじめ、茨木市、茨木商工会議所、大阪大学・近畿大学・梅花女子大学・追門学院大学の学生、地元婦人会、地元NPO、夏休み中の児童が、“打ち水”に集いました。「今日も暑いですね！」は、新たな“縁結び”の合言葉となりました。

１人で取り組むより、みんな

で取り組んだ方が効果的。この当たり前のことが、当たり前にできる喜びを実感できたのではないでしょうか。

打ち水〜。地球の温度が少しでも下がりますように。

関西国際空港でのPR

「もったいない」が環境用語として国際的に普及しつつありますが、「打ち水」も日本の環境と共生した古くからの慣習・文化です。これを国内外に広くPRしようと、さる8月9、12、16、18の4日間、関西国際空港においてPRブースを設け、国際アンケートを兼ねたチラシの配布など延べ1万人近くの人々にPRを行いました。PRには、(株)関西国際空港会社、JALグループやANAの客室乗務員や地上勤務の方々、出展企業の方々の協力も得られました。

また、夕刻には、クラシックギターソロやジャズボーカル&ギター、弦楽四重奏など黄昏コンサートも行われました。

和(わ)ォ！環(わ)ォ！輪(わ)ォ！…

夏の暑さで頭が変になったわけではありません。8月26日、大阪府三島府民センターにおいて、今夏の打ち水大作戦の1つの

まとめとして、「2006打ち水からまちづくりフォーラム－和(わ)ォ！環(わ)ォ！輪(わ)ォ！打ち水祭り－」が開催されました。

北大阪の環境NPOと大阪府や地元自治体等からなる「北大阪打ち水ネット」のメンバーを中心に、企業等も含めて、約40団体の参加がありました。

午前中は、「打ち水を感じよう」と題し、20点以上の展示がありました。各地域での打ち水活動を表現したパネルや小学生の打ち水体験の絵作文、道路に穴を開け透水性舗装にする機械、太陽光パネル、雨水タンク、壁面緑化など涼しいまちづくりのための装置やグッズなども展示されました。展示の他には、手づくりの環境紙芝居、竹の水鉄砲づくり、太陽熱を利用したソーラークッキング、うちわづくり等体験コーナーがにぎわいました。

午後は、「打ち水の未来を語ろう」と題し、すだれや風鈴、氷柱など涼しい演出の中、出演者も浴衣や甚平姿で座談会です。今夏の取り組みをスライドとインタビューでふりかえった後、夏の夕涼みよろしく、床机に座ってクロストークです。市民、NPO、商店街、企業、デザイナーの立場から、本音トークが交わされます。

子ども時代のお手伝いや大学の体育会でのグラウンドへの水まきなど「私と打ち水との馴れ初め」を紹介し合った上で、これからの「打ち水論」が展開されます。いくつか言葉を拾ってみましょう。

活動を続けるには節目の盛り上げが大切、大変でも続けることが最終的には文化になる、やっぱり情報共有、打ち水の取り組みはまちをきれい（清掃）することにつながる、人の心に届けるふるまい水、四季･五感･コミュニティ、打ち水の取り組みを環境と福祉・雇用（経済）に結びつけようと思った、でもやっぱり人と人とのつながりが大切など、フォーラムの表題のねらい通り、今後へ向けた貴重な意見交換となりました。

単なるイベントからヒートアイランド対策及びライフスタイルを含めたまちづくりへ、北大阪から国内外へと、取り組みをより本質へと展開されつつある「北打ち水大作戦」ですが、3年目に向け、これから秋・冬の間により深化されることと思います。

クリエイティブ・カフェと自由大学

大阪事務所／杉原五郎

7月29日の土曜日、昼過ぎから始まった但馬の「上山高原エコミュージアム」のグランドオープン式典に出席し、その後、3時過ぎの「スーパーはくと」に乗って大阪まで戻ってきた。

南堀江にある小さなビルに、デザイナー、写真家で詩人、大阪フィルの関係者、新聞の文芸担当記者、大学の先生、コンサルタント、政府系金融機関に勤務するサラリーマン、文化行政を担当する行政マンなど多彩な顔ぶれが約50名ほど集った。

7時過ぎから始まった第3回クリエイティブ・カフェに、私は報告者として参加した。《都市資産～その知の創発～関西圏の知的創造力を高めるには》をテーマに、パワーポイントを使って20分ほどスピーチした。2番目のスピーカーは、辻邦浩さん（ロボテック・スペース・デザイン研究所長）。

二人が話題提供を始めたときから会場はすでに交流一色で、ワイワイがやがやと騒然たる雰囲気となっていた。ワインを片手に、チーズなど軽いスナックをほおばりながら、初対面の人同士の名刺交換や挨拶があちこちでなされ、いろんな情報が飛び交った。

全体に、活気のある集まりで、知的な女性が数多く参加していることが印象的であった。都市と文化とアートに関心を持つ異分野のメンバーが自由に語り合う場として、クリエイテイブ・カフェは新鮮な印象を受けた。このクリエイティブ・カフェを今年の5月に立ち上げた佐々木雅幸氏（大阪市立大学創造都市研究科教授）は、「まちに元気がなくても、面白い場所はたくさんある。仕掛けている人が交流すれば、大阪全体を変えるアイデアが生まれるはず」と期待している。

同じく、7月22日土曜日の午後、京都駅前のコンソーシアム京都に足を運び、「京都自由大学校（ラスキン・スクール）」の講義を聞いた。この京都自由大学校は、池上淳先生（京都大学名誉教授）が中心となって今年の4月に開校したもの。「自分の人生を振り返りつつ、自分たちの生活する都市や地域に注目する人々の学校」との位置づけのもとに、「まだ発見されていない隠された文化や伝統の価値を発見して、今後の人生の展望を拓こうとする人々に対して、貴重な出会いと学習の機会を提供することを目指す」とされている。

いま、「大学」が熱い。私の住んでいるけいはんなでも、「けいはんな市民アカデミー」を創設しようとの動きがある。けいはんなが、文字通り、文化を冠した魅力と活力のある学術研究都市になるよう、手づくりの市民大学が創れたらと夢を膨らませている。

ちなみに、けいはんなのまちづくりを考える会は、2002年12月創設以来30回近い例会を積み重ね、多くの「市民教授」を産み出してきた。

MEDIA WATCH

紹介者／取締役会長　三輪泰司

「モナ・リザと数学」
ダ・ヴィンチの芸術と科学

著者／ビューレント・アータレイ
訳／高木隆司・佐柳信男
出版／化学同人

芸術系大学で、かれこれ10年、授業を受け持ってきて、奇妙に思ってきたことは、芸術大学はサイエンスやテクノロジーとは無縁という風潮である。入試で数学や物理もなかった。それは入試－学生募集、つまり経営策のせいである。

建築デザイナーを志す諸君は、フラクタルや、1／fゆらぎの話をすると、興味津々である。

ところで「レオナルド・ダ・ヴィンチは、天才的な芸術家であると同時に、優れた技術者にして発明家であった」という“説”にもちょっと異議がある、と思っていたところに、今年5月1日、この本が出た。小説と映画「ダ・ヴィンチ・コード」が話題を呼んでいて、タイムリーといえるが、この本の趣はちょっと違う。352頁もあって、結構重たい。

出版社は、月刊誌「化学」をはじめ、自然科学分野の書籍や辞書を出していて京都事務所のすぐ近くに本社がある。

著者は、アメリカのメアリー・ワシントン大学教授で、理論物理学者。プリンストン高等研究所研究員であると同時にリトグラフ集も出している画家としても知られている。この本でも彼の絵が一役かっている。訳者・高木隆司氏の専攻は“形の科学”・物理学で、神戸芸術工科大学教授である。

こうこなくっては、と共鳴した。

本書の主題の一つは、第2章「科学と芸術の合流」。科学者と芸術家は同じである。ダ・ヴィンチは、天才ではあるが芸術家にして云々というような、特異な怪物的存在ではない。でも、ダ・ヴィンチを今の尺度で評価してもいけない。

町田茂先生は「量子力学のふしぎな世界」で「人類のいままでの知的遺産の積み重ねがどんなに素晴しいものであっても、それは、非常に限られた範囲内のものであったことは間違いない」といっている。

量子力学は20世紀最大の発見のひとつ。15世紀末に生きたダ・ヴィンチは、遠近法や黄金比“ϕ”は知っていたし、多分直感的に二重らせんも描いたが、量子力学の美しさは知らなかった。本書の第二の主題、結論は終わりの第13章「分かれた文化をつなぐもの」。類は友を呼ぶ、類は類をもって集まる。科学者・技術者の世界と芸術家・デザイナーの世界は別々の文化圏をつくってしまう。ダ・ヴィンチは、芸術家か科学者かと居場所を決めてあげることなど、望んでいなかった。未来は境界を越えることで拓かれる。

リサ・ランドールが提唱した5次元空間に至っては、夢幻の世界まで“つなぎ”そうです。

（彼女の「Warped　Passages」は、まだ邦訳がないので、読むのに手間どっていますが、次号には紹介できるかも）

まちかど

篠山城下町で古民家の修理事業が始まりました

大阪事務所／和田　裕介

篠山と言えば秋の味覚、黒豆や栗、牡丹鍋とおいしそうなまちのイメージがありますが、丹波国篠山藩だった頃の雰囲気を残す、歴史情緒溢れるまちでもあります。城下町はお城を中心にゆったりとした敷地を持つ茅葺きの武家屋敷が広がり、さらにそのまわりを鰻の寝床のような敷地の妻入商家がくるりと取り囲んでいます。平成16年12月には、昭和40年代後半から続く住民によるまちなみ保存活動の成果も実り、全国で65番目の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

大阪事務所では平成13年度から、城下町の保存対策調査や重伝建地区指定に向けたお手伝いをさせて頂いており、その縁もあって、昨年度は重伝建地区内に残る建築物の修理工事の設計監理を2軒行いました。

1軒は武家町に残る長屋門の修理工事です。長屋門は長年の雨漏りから小屋組が腐ってしまい、いつ屋根が落ちてきてもおかしくないような状態でした。修理は各部分を一度バラバラに解体し、使える部材をもう一度使い（結局あまり使えなかったのですが…）、建て直すという解体修理の手法を採りました。屋根は瓦葺で、軒裏は修理前と同じ竹野地としています。壁は木舞下地による漆喰塗とし、そもそも馬屋であった事からも三和土の床や使用人の小さな部屋を復原しています。また、お施主さんの古い記憶から、木材にはベンガラを油で溶いたものを塗りました。

もう1軒は商家町に残る、市の指定文化財でもある商家住宅です。ここでは土塀が老朽化により痛んでいた為、漆喰の塗替えや腰板の張替え、瓦の葺替え等を行いました。

昨年度は重伝建地区選定後、初めて修理事業が行われた年でした。町並みを守り伝える為には、建物がきれいになるだけではだめで、当然、住民の皆さんの活き活きとした暮らしが無いと成り立ちません。地元には高齢化や後継者問題、無住の空き家など様々な課題が残されています。けれど、修理事業の始まりによって、住民の皆さんや行政、設計者、大工さん、職人さん…、みんなの中で今まで想い描かれていたまちづくりという価値観がようやく形になって現れた事は確かです。

長屋門（写真上：修理前　下：修理後）

商家の土塀（写真上：修理前　下：修理後）

アルパック（株）地域計画建築研究所

http://www.arpak.co.jp　E-mail info@arpak.co.jp

本　社

京都事務所　〒600-8007　京都市下京区四条通り高倉西入立売西町82　TEL(075)221-5132　FAX(075)256-1764

大阪事務所　〒540-0001　大阪市中央区城見1-4-70 住友生命OBPプラザビル15F　TEL(06)6942-5732　FAX(06)6941-7478

名古屋事務所　〒460-0003　名古屋市中区錦1-19-24 名古屋第一ビル8F　TEL(052)202-1411　FAX(052)220-3760

東京事務所　〒186-0001　東京都国立市北1-1-17 田畑ビル3F　TEL(042)501-2531　FAX(042)501-3024　分室／TEL(03)3226-9130

九州事務所　（株）よかネット　〒810-0802　福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F　TEL(092)283-2121　FAX(092)283-2128